

# 中金井遺跡群 下金井遺跡

長野県佐久市小田井下金井遺跡発掘調査報告書

2012.12

株式会社 大建  
佐久市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は株式会社 大建による平成24年度（仮称）小田井地区宅地造成工事に伴う中金井遺跡群下金井遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 事業主体者 株式会社大建 代表取締役 増田悌造
- 3 調査主体者 佐久市中込3056
- 4 佐久市教育委員会 教育長 土屋 盛夫
- 5 遺跡名及び発掘調査所在地  
中金井遺跡群 下金井遺跡
- 6 佐久市小田井字下金井719番2
- 7 調査担当者 上原 学
- 8 本書の編集・執筆は上原が行った。
- 9 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1 遺構の略称は以下のとおりである。  
H—堅穴住居址 F—掘建柱建物址  
D—土坑 M—溝跡 P—ピット
- 2 スクリーントーンの表示は以下のとおりである。  
遺構  
地山断面  焼土  粘土   
遺物  
黒色処理  石器使用痕  須恵器断面 
- 3 抑圖の縮尺は以下のとおりである。  
遺構—堅穴住居址・掘建柱建物址・土坑・  
ピット 1/80 溝跡 1/80・1/100  
遺物—土器・石器1/4、白玉1/1、筋錘車1/2
- 4 遺物の写真番号と実測図番号は一致する。
- 5 遺構の標高は、水糸高を標高とした。
- 6 調査グリッドは小グリッド4×4m、大グリッド40×40mである。
- 7 遺物表中の〔〕は推定値、〈〉は残存値を表す。

## 目 次

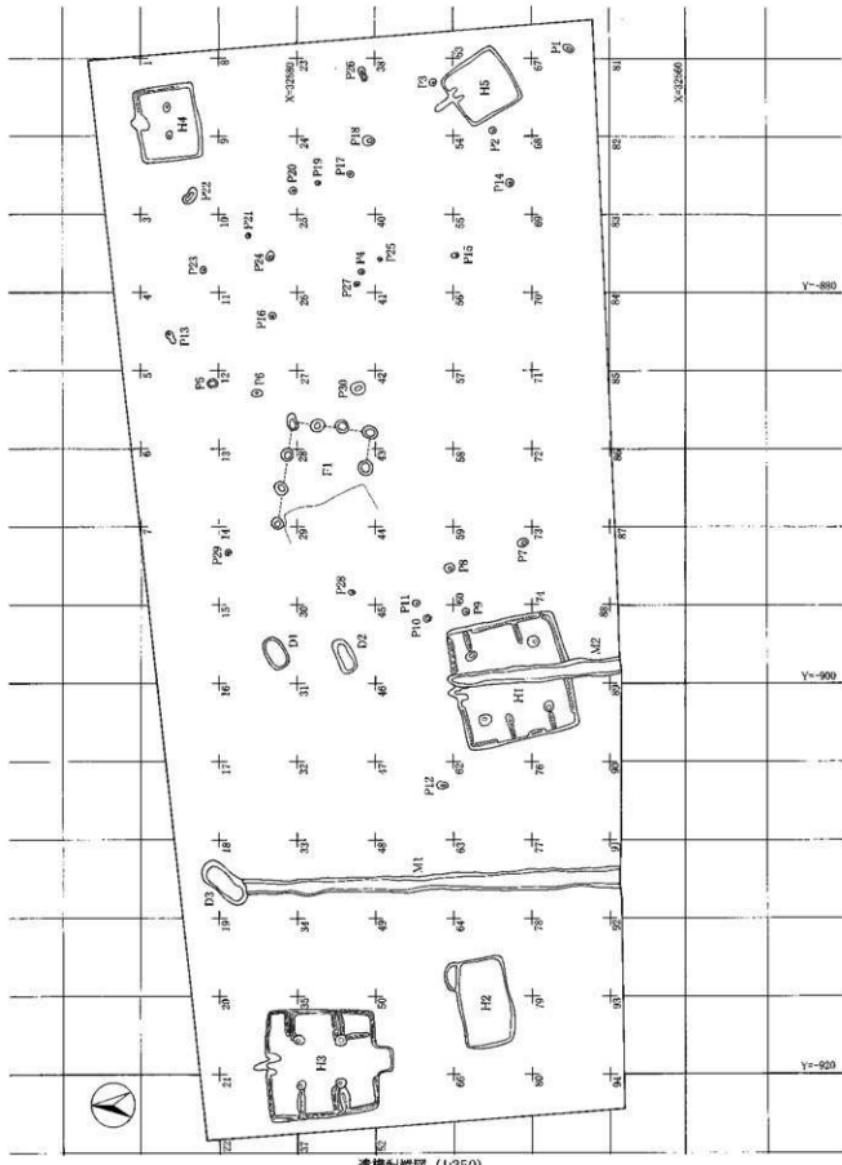
例言・凡例・目次	
第Ⅰ章 発掘調査の経緯	
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査日誌	1
第3節 調査体制	2
第4節 発見された遺構と遺物	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	2
第1節 自然環境	2
第2節 周辺遺跡	2
第3節 基本層序	5
第Ⅲ章 遺構と遺物	5
第1節 堅穴住居址	5
第2節 掘建柱建物址	13
第3節 土坑	13
第4節 溝跡	14
第5節 ピット	15
写真図版	



調査区位置図 (1:100,000)



調査区位置図 (1:10,000)

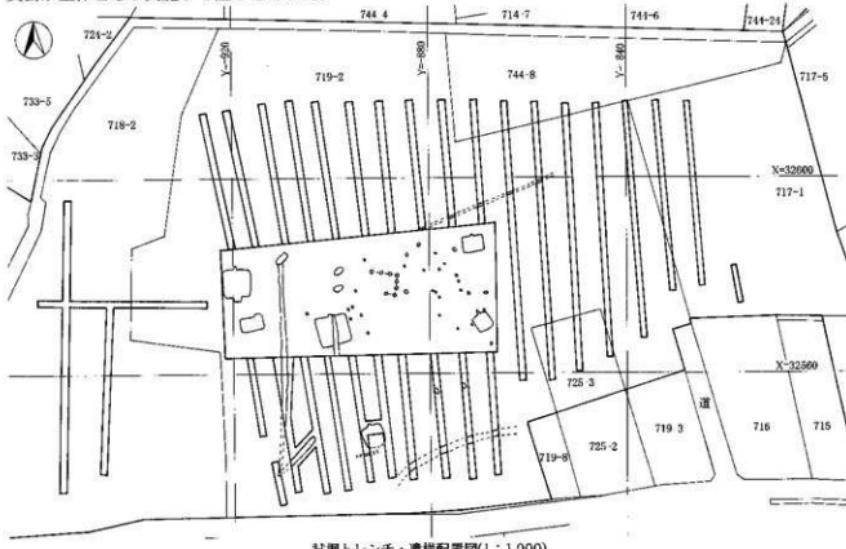


## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査の経緯

中金井遺跡群は佐久市北端に位置し、佐久地域特有の浅間山の麓から放射状に延びる浸食谷である田切りに挟まれたおよそ南北方向に細長い台地上に展開する、縄文時代から中世に至る複合遺跡である。開発地域は遺跡群中央付近の台地西端に接した21,000m<sup>2</sup>を超える範囲で、調査対象地となる下金井遺跡はこの中央付近に位置する。標高は749m内外を測る。

今回、株式会社 大建による宅地造成工事が行われることとなり、平成23年度に試掘調査を実施した。その結果、地表下0.2~1mにて竪穴住居址等の遺構が発見された。これにより、開発主体者側と協議を重ね、道路部分及び確認面が浅い地域で発見された遺構について、記録保存を目的とした発掘調査を佐久市教育委員会が主体となり実施する運びとなった。



### 第2節 調査日誌

#### 現場作業

7月12日～ 文化財保護協議 道路部分にかかる遺構及び検出面までの深度が浅い地域の発掘調査を実施し、その他の地域に所在する遺構については埋土保存とした。

7月25日 埋蔵文化財委託契約。

8月 2日～ 機材準備・搬入。

8月 6日～ 開発主体者側の重機による表土除去作業開始。ハウス・トイレ設置。

8月 8日～ 8月30日 調査員による発掘調査。検出作業・遺構掘り下げ・図面作成・写真撮影・機材撤収・整備作業・開発主体者側による基準杭設定作業。

#### 室内整理作業

8月29日～11月30日 遺物洗浄・注記・接合・実測・写真撮影・遺物整理・図面修正・写真整理・遺構遺物トレース・図版作成・原稿作成。

12月 報告書刊行。

### 第3節 調査体制

#### 調査受託者

佐久市教育委員会 教育長 土屋盛夫

#### 事務局

社会教育部長 伊藤明弘

文化財課長 吉澤隆

文化財調査係長 三石宗一

文化財調査係専門員 須藤隆司

小林真寿

羽毛山卓也

富沢一明 上原学

文化財調査係

並木節子

神津一明

久保浩一郎

嘱託職員 林幸彦

調査主任 佐々木宗昭

森泉かよ子

#### 調査担当者 上原学

#### 調査員 浅沼勝男 江原富子 小幡弘子 風間敏 狩野小百合 木内勇

小井戸秀元 小林百合子 清水律子 滝沢三男 田中ひさ子 土屋武士

中嶋フクジ 比田久美子 日向昭次 広瀬梨恵子 武者幸彦

柳澤孝子 渡辺長子 渡辺学

### 第4節 発見された遺構と遺物

遺構 堅穴住居址-5軒 古墳時代 掘建柱建物址-1棟 土坑-3基 溝跡-2条 ピット-30個

遺物 上師器(环・高环・甕・壺・懸) 石器・石製品(纺錐車・臼玉・すり石・敲石・台石) 須恵器 繩文土器

## 第二章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

佐久地域は、周辺を山地台地に囲まれた盆地状を呈し、一般に佐久平と呼ばれ、北には雄大な浅間山、南には蓼科山が存在する。東には群馬県との境を成す北関東山脈の北端が延び、西は御牧原・八重原といった小高い台地が広がり、蓼科山の裾野と接している。佐久地域における水系の代表は、南方の川上谷に源を発す千曲川であり、北流しながら支流を集めつつ水量を増して佐久平に入る。その後野沢付近から流れを北西に変え、蓼科山麓の支流を集めた片貝川、浅間山の麓に源を発す湯川、関東山地からの支流を集めた滑津川といった河川と合流し、蛇行しながら上田、長野方面に貫流する。この山地に開まれ、水にも恵まれた盆地状の佐久平は、地質学的に見ると大きく二分することができ、志賀川と滑津川が合流し、さらに千曲川と川筋を一つにする東西線を境として、河川の北側段丘と南側では20m前後の比高差が認められる。この北部地域は北方の浅間山麓部の緩やかな台地、浅間山の噴出物である火碎流軽石流と隣下火山灰が厚く堆積している。この堆積物は雨水による浸食に弱く長い年月の間に深く削り取られ、浅間山の麓から放射状に幾筋もの浸食谷(田切り)を形成している。

これに対し南部地域は千曲川の氾濫源沖積地と滑津川の谷口扇状地等で、河床疊層と冲積粘土層地帯が主となり地下水位も高く、地盤の安定した土地である。このため南部一帯は広く水田として利用されていた。今回調査を実施した下金井遺跡は、北部地域の浸食谷(田切り)に挟まれた南北方向に細長い台地西端に近い、標高749m内外を測る湯川右岸河岸段丘上に位置する。

### 第2節 周辺遺跡

繩文時代-東方では、湯川対岸の左岸河岸段丘上に立地する棚畠遺跡(40の東方地図外)から中期の堅穴住居址・上坑及び前期～後期の遺物が発見され、小規模ではあるが集落の存在が確認されている。本調査地域を含む湯川右岸では、南の東毛坂遺跡群南端台地上で上信越自動車道建設に伴い長野県埋蔵文化財センターが行った調査によって、早期木～前期木を主体とする石器関連遺構と推測される集石群が発見された。また、流辺田建設に伴い調査が行われた長上呂遺跡群原遺跡(18)からは落とし穴状の土坑が確認されている。中金井遺跡群を含めた湯川右岸周辺では、今のところ集落を想わせる遺跡の存在は発見されていない。

弥生時代-中金井遺跡群内周辺で遺物の出土は認められるが、弥生時代の集落と呼べる遺跡は発見されていない。南の湯川下流域では段丘に沿って、北西の久保遺跡、西一本柳遺跡、北一本柳遺跡、西八日町遺跡

等、中期後半から後期の遺跡が多数発見されているため、本遺跡においても東方の湯川段丘上に遺跡が存在する可能性は考えられる。

古墳時代－調査区南に島原古墳(4)・からむし古墳(9)が存在する。北には皎月古墳(3)が存在している。古墳はいずれも円墳である。前期の集落は、東方の湯川対岸に位置する棚畠遺跡(40の東方)、腰巻遺跡(49)、下小平遺跡、池端遺跡から住居址等の遺構が発見されている。これに対し、湯川右岸の中金井遺跡群周辺で集落と呼べる遺跡の発見は認められない。南方の湯川右岸に栄えた弥生の集落は古墳前期になると激減し、湯川左岸に小規模な遺跡が認められる程度となる。しかし、この状況も住居内にカマドが導入され始める中期後半になると発見される遺跡も増加傾向に転じ、後期にかけて湯川右岸の台地上にも聖原遺跡(17-18・19)、上芝宮遺跡(28)、下曾根遺跡(28)など大規模な遺跡が形成されてくる。96,900m<sup>2</sup>の調査を実施した聖原遺跡(18)では155軒の住居址が調査されている。

奈良・平安時代－周辺の台地に展開する遺跡からは多くの遺構が発見されている。南西の浸食谷を隔てたた栗毛坂遺跡群前藤部遺跡(12)からは北カマドを持つ8～9世紀及び南東コーナー付近にカマドを持つ平安末頃と考えられる住居址が10軒発見された。さらに谷を隔てた聖原遺跡(18)の発掘調査では663軒の住居址が調査されている。出土遺物には、暗文によって『佛』・『甲斐國山梨郡大野城戸口』等と記載された土師器鉢、『伯万私印』と浮き彫りされた石製印、皇朝十二錢12枚『和同開珎1・神功開寶1・隆平永寶4・富壽神寶3・承和昌寶2・長年人寶1』等、貴重な遺物も多数出土している。この他上芝宮遺跡(28)、下曾根遺跡(31・32)、曾根新城遺跡(33、34地図外)、上久保田向遺跡(21-22・23)からも多くの遺構が発見されている。

中世－この時代の代表的な遺跡は城館跡であり、佐久平一帯において、平城・山城と考えられる地域は多数存在する。本調査区の周辺地域だけでも南西の曾根城、鶴代田町の小田井城、湯川対岸の延寿城(41)、白岩城(44・45・46)、平尾城跡(42の東方枠外等)等が存在し、これらは田切り地形によって形成された台地または山そのものを利用し築城されている。本遺跡の台地北端一部に展開する金井城(5)は、発掘調査によって遺跡の詳細が広い範囲で確認されている佐久地域でも代表的な城郭である。城郭は20万m<sup>2</sup>を越える広さを持ち、築城は16世紀代と考えられている。発掘調査は、昭和63年～平成2年にかけて工場団地造成に伴い約80,000m<sup>2</sup>の調査が実施された。“郭の一部、三郭、北郭の大部分、外郭の1/3以上の構造が明らかとなり、城内からは堅穴建物址、土坑、掘立柱建物址、堀・溝状遺構、土塁関連遺構が発見されている。

No.	遺跡名	山形	秀	古	明	中	近	備考
1	中金井地跡群下金井遺跡	○						
2	中久井遺跡群	○	○	○				
3	皎月古墳	○						
4	島原古墳	○						
5	今井城跡	○	1588263	佐久市篠1馬				
6	企木城跡IV	○	8010263	佐久市篠300馬				
7	開田・中金井遺跡	○	1987962	佐久市春日第一開田				
8	諏訪遺跡	○	○	○				
9	かむし古墳	○						
10	栗毛坂遺跡群	○	○	○				
11	西ノ原遺跡群I	○	○	1989～1992.11～19	佐久市筑38馬			
12	西ノ原遺跡群II 舞鶴原遺跡	○	○	1986-87.8.8-9	佐久市篠40馬			
13	西ノ原遺跡群 III 上御用原遺跡	○	○	1990.2	佐久市筑6馬			
14	栗毛坂遺跡群 IV 区	○	○	○	1986.5.61)	栗毛坂セイバ村25馬		
15	西ノ原遺跡群 IV 区	○	○	○	1987-88.9.9-6.63)	栗毛坂セイバ・村25馬		
16	栗毛坂遺跡群 C 区	○	○	○	1986-87.1.16-1.62)	栗毛坂セイバ・村25馬		
17	久・只道跡群	○	○	○	○			
18	只道跡群御原原跡	○	○	○	1986-1985.8.7-2.7	佐久市篠13-12馬+12馬		
19	只道跡群御原原跡 II	○	○	1989.01)	佐久市篠10馬			
20	能代駿跡群	○	○	○				
21	只道跡群御原跡 II	○	○	1989-90.11-12)	佐久市篠41馬			
22	只道跡群御原跡 III	○	○	1992.04)	佐久市篠30馬			
23	只道跡群御原跡 IV	○	○	1992.04)	佐久市篠35馬			
24	西ノ原遺跡群 IV	○	○	7000.12.3)	佐久市篠10			
25	曾根城跡	○	○	○	○			

No.	遺跡名	田	圃	水	古	曽	中	近	備考
26	芝宮遺跡群	○	○	○					
27	芝宮遺跡	○	○	○					
28	ト芝宮遺跡・下哲根遺跡	○	○	○					
29	哲根城跡群 I	○							
30	哲根城跡群 IV	○	○	○					
31	下哲根遺跡Ⅱ	○	○	○					
32	下哲根遺跡 IV	○	○	○					
33	吉祇新田遺跡				○				
34	曾根新城遺跡 V	○	○	○					
35	厚別城跡群 VI	○	○	○					
36	近澤遺跡群	○	○	○					*
37	時動城遺跡群	○	○	○					
38	御城遺跡	○	○	○					
39	手の爪遺跡群	○	○	○					
40	上長坂遺跡群	○	○	○					
41	延寿城跡				○				
42	上の原遺跡群	○	○	○					
43	櫛原二塚群				○				
44	白石城跡				○				
45	白石城跡 II				○				
46	白石城跡 III				○				
47	宿古城				○				
48	磐梯古墳				○				
49	豊巣遺跡	○	○	○	○				
50	西久保田向遺跡	○	○	○	○				

周辺遺跡表

No.	遺跡名	旧	鶴	舟	古	歷	中	近	備考
51	西久保遺跡群 西久保遺跡群	○		○	○				1958年8月 佐久市第53編
52	東久保遺跡群	○	○	○	○				
53	西久保遺跡群	○	○	○	○				
54	弓の西古墳		○						
55	佐久原遺跡Ⅰ		○	○					2003年11月 佐久市第117編
56	赤堀城外遺跡Ⅰ	○	○	○	○				1960年12月 在久市第118編

No.	遺跡名	旧	鶴	舟	古	歷	中	近	備考
57	中央保田遺跡			○	○	○			
58	大井城跡				○	○	○		
59	岩村田遺跡群				○	○	○		
60	酒石古窯					○			
61	酒石古窯				○	○	○		

周辺遺跡表 2



周辺遺跡位置図 (1:12,000)

### 第3節 基本層序

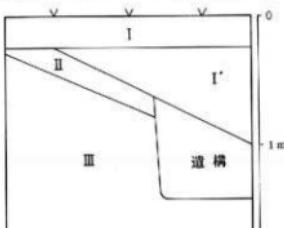
遺跡は、浅間山の麓から放射状に延びる浸食谷に挟まれた『田切り』地形の細長い台地上に立地する。この付近は、現在の浅間山が形成される過程で噴出した軽石流が基盤となっており、この上面に現在の表土が覆っている。今回調査を実施した地域の基本層序は以下のとおりである。

I 層は層厚20~30cmを測る表土で、碎石等を含む埋土された整地層である。

I' 層は整地層直下に残存した耕作土等の旧表土で層厚1~80cmを測る。

II 層は層厚0.1m内外を測る表土と黄褐色軽石流間の漸位層である。本層の下層付近で遺構の存在が僅かに認められる。

III 層は浅間山の噴出物である第二軽石流、黄褐色ロームである。遺構確認はこの上面で明確に確認できる。

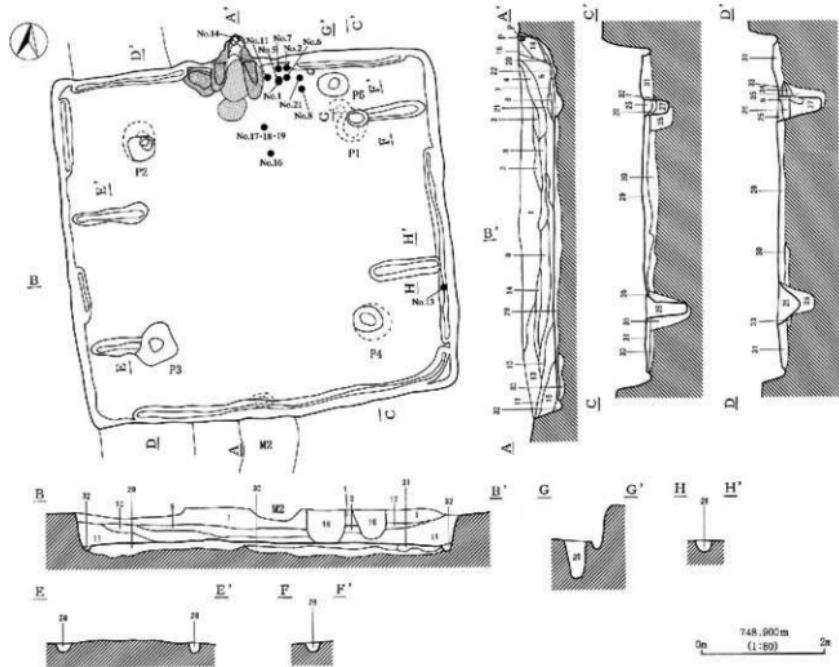


基本層序模式図

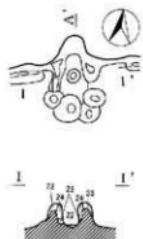
### 第三章 遺構と遺物

#### 第1節 堅穴住居址 (H)

##### H 1号住居址



H 1号住居址実測図 (1)



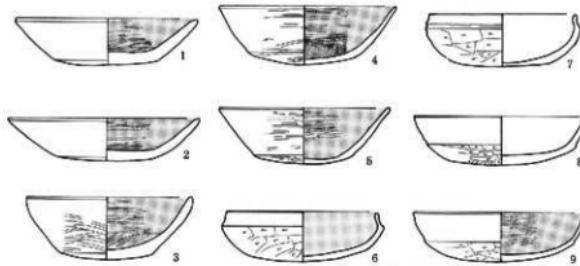
- 1 黒褐色土層(10YR2/3)軽石・ローム・炭化物含む。
- 2 黒褐色土層(10YR2/2)軽石・ローム・炭化物含む。
- 3 灰褐色土層(7.5YR4/2)白色粘土・粘土・炭化物多・軽石・ローム含む。
- 4 黑褐色土層(10YR3/1)粘土多量・炭化物・焼土・軽石含む。
- 5 灰褐色土層(10YR3/3)粘土・燒土・少量・軽石・炭化物・ローム含む。
- 6 にぶい赤褐色土層(3YR4/3)粘土。
- 7 にぶい赤褐色土層(3YR4/3)粘土・炭・炭化物含む。
- 8 黑褐色土層(7.5YR2/2)粘土・炭化物・軽石・ローム含む。
- 9 にぶい赤褐色土層(5YR4/4)粘土・粘土質・ロームブロック・軽石・炭化物含む。
- 10 黑褐色土層(10YR2/2)軽石・ローム・炭化物・粘土粒少含む。

- 11 褐色土層(7.5YR4/3)軽石・ローム・焼土・炭化物含む。
- 12 褐色土層(7.5YR4/4)ローム多量・軽石・炭化物含む。
- 13 黒褐色土層(7.5YR3/2)ローム・軽石・燒土・炭化物含む。
- 14 褐色土層(7.5YR4/4)ローム多・軽石・炭化物含む。
- 15 灰褐色土層(7.5YR3/4)ローム・軽石含む。
- 16 黑褐色土層(10YR2/3)ローム・軽石含む。
- 17 黑褐色土層(10YR2/3)ロームやや多・軽石・炭化物含む。
- 18 にぶい褐褐色土層(7.5YR5/3)粘土粒・焼土・軽石・ローム多く含む。
- 19 灰褐色土層(7.5YR4/2)粘土少含む。しわなし。
- 20 灰褐色土層(7.5YR2/3)灰主体・底上・炭化物含む。しまりなし。
- 21 赤褐色土層(2.5YR4/6)粘土層。
- 22 褐色土層(7.5YR4/4)ローム主体・炭化物・粘土粒含む。
- 23 明褐色土層(7.5YR7/1)粘土層。
- 24 にぶい褐色土層(7.5YR6/3)粘土層・熟に由来ホモを帯びる。
- 25 灰褐色土層(10YR3/3)ローム・軽石含む。しまりなし。
- 26 灰褐色土層(10YR2/2)ローム・軽石含む。しわなし。
- 27 灰褐色土層(10YR3/4)ローム多く・軽石・粘土粒含む。しまりなし。
- 28 灰褐色土層(10YR3/4)ローム・軽石含む。しまりなし。
- 29 にぶい黄褐色土層(10YR5/4)ローム主体・硬質。
- 30 にぶい黄褐色土層(10YR6/4)ローム主体・粘土含む。
- 31 黑褐色土層(10YR2/3)ローム・軽石含む。板質。(床)
- 32 にぶい黄褐色土層(10YR4/3)しわなし。(床面)
- 33 黑褐色土層(10YR2/3)便質。
- 34 灰褐色土層(10YR3/3)ローム・軽石含む。ややしまりあり。
- 35 にぶい黄褐色土層(10YR4/3)ロームブロック・軽石含む。ややしわあり。

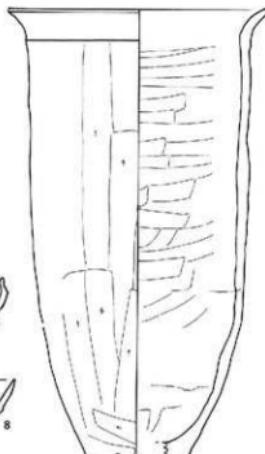
H1号住居址実測図 (2)

遺構は75グリッドに位置し、M2に切られる。規模は南北5.2m、東西6.2m。検出面から床面までの深さは最深で0.6mを測る。平面形態は方形である。床面はやや凹凸は認められるが全体的に平坦硬質である。壁際には幅15~20cm、深さ10cm内外の溝が掘り込まれている。また、西及び東壁から中央に向かって長さ1~1.2mの溝が4本存在し、2本は主柱穴につながる。間仕切り溝と思われる。ピットは床面上で5個確認できP1~4が主柱穴である。P5は形態的にピット状であるが位置的に貯蔵穴的な役割があった可能性も考えられる。カマドは北壁中央に構築され、両袖の一部及び火床から煙道への立ち上がりが残存していた。袖部は削り出した地山のロームを基礎として、白色の粘土で覆っており、石材は利用していないかった。煙道は焼土の堆積した火床奥からやや急な角度で検出面まで立ちあがり、煙道の出口を覆うような状態で土器片が出土した。掘方は中央部が浅く、周辺部がやや深く掘り込まれていた。

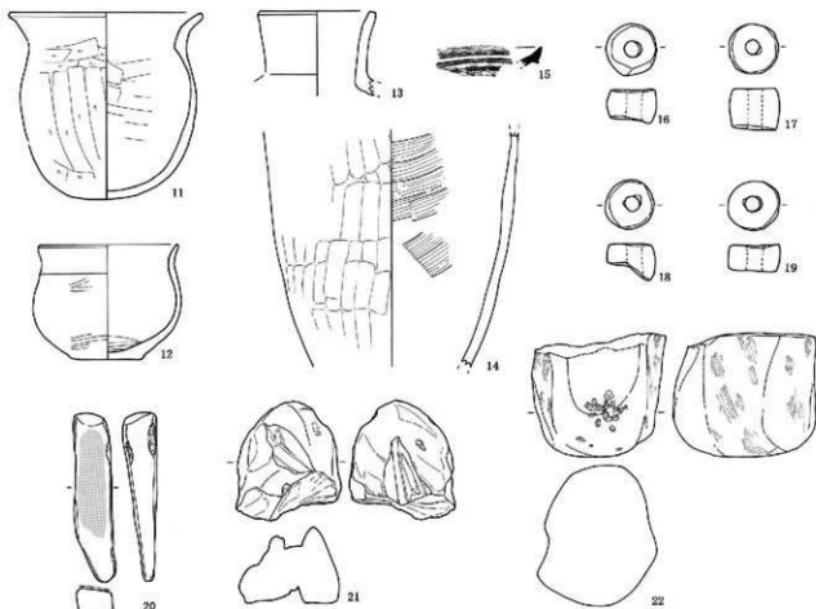
遺物は土師器の壺・高壺・甕・小型甕・瓶・壺、須恵器壺?・石製白玉、すり石、加工痕を持つ軽石が出土した。大半は土師器で、須恵器は2片である。カマド東脇から多くの土器が積み重なるように出土した。



H1号住居址実測図 (1)



本住居址は、平底気味で大きく開き直線的に口縁に至る形状及び体部途中に明瞭な稜を持つ土師器坏、直線的な脚部を持つ長脚甕から古墳時代後期7世紀としたい。



H1号住居址遺物実測図(2)

番号	器種	形	口径cm	底径cm	高さcm	測定・文様	現存率・部位	色成	備考
1	土師器	坏	14.7	8.4	3.8	外面ヘラケズリ 内面藍色施墨	95	良	10YR5/4 にぶい薄青色
2	土師器	坏	15.4	7.5	3.6	外面ヘラケズリ 内面黑色施墨 内面有段	85	良	7.5YR5/4 にぶい黒色
3	土師器	坏	13.4	7.4	5.2	外面ミガキ 内面黑色施墨	80	良	10YR5/4相
4	土師器	坏	14.3	9.2	4.7	内面黑色施墨	60	良	7.5YR5/4 にぶい青色
5	土師器	坏	[13.8]	[8.2]	4.6	外面ミガキ 内面黑色施墨	50	良	7.5YR6/2相 皮膜色
6	土師器	坏	12.1	丸底	4.1	内外面黑色 口沿横ナデ 外面ヘラケズリ 内面ナデ	95	良	2.5Y4/1 黒色
7	土師器	坏	11.8	丸底	4.3	口沿横ナデ 外面体部ヘラケズリ 本來底? 内面ナデ	60	良	2.5Y4/1 黒色
8	土師器	坏	14	丸底	4	口沿横ナデ 外面体部ヘラケズリ 内面ナデ ミガキ	90	良	3YR6/6相 褐色
9	土師器	坏	13.8	丸底	4	外面上口沿横ナデ 体部ヘラケズリ 内面ミガキ 黑色施墨	70	良	10YR4/1
10	土師器	長脚甕	21.1	5	37.2	口沿横ナデ 外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ	80	良	7.5YR5/3相 にぶい青色
11	土師器	甕	13.3	丸底	15.2	口沿横ナデ 脚部外面・底部ヘラケズリ 内面ヘラナデ	60	良	10K7/4 にぶい黒色
12	土師器	小型甕	11.3	5.8	9.5	口沿横ナデ 脚部外面・底部ヘラケズリ 内面ヘラナデ	85	良	3YR6/4相 にぶい青色
13	土師器	甕?	9.6	—	(6.8)	口沿ミガキ	口縁	良	7.5Y4/1 にぶい黒色
14	土師器	長脚甕	—	—	(19.2)	外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ	脚部	良	7.5YR5/3 にぶい青色
15	須磨器	甕?	—	—	—	外表面施波文 口唇部横沈線	口縁裏	良好	10YR4/1 黒色

H1号住居址遺物観察表(1)

番号	器種	器形	長さcm 横幅cm	深さcm 高さcm	厚さcm	重量g	色調	備考
16	石製物	白玉	1	1	0.7	1.39	10YR1/1 灰白色	丸盤0.35
17	石製品	白玉	1	1	0.9	1.7	10YR1/1 灰白色	丸盤0.3
18	石製物	白玉	1	1	0.8	1.01	7.5YR1/1 灰白色	丸盤0.3
19	石製物	白玉	1	1	0.5	1.08	7.5YR1/1 灰白色	丸盤0.3
20	石器	すり・研磨 石器	13.8	3.4	2.7	162.64	10YR2/1 灰白色	正面に刃面。右側に敲打痕
21	石器	研磨 磨石	9.7	8.6	7.1	141.54	10YR2/1 灰白色	正面に深い溝痕
22	石器	台石?	(10.2)	(1.1)	(1.1)	(159.90)	2.5YR7/1 灰白色	上部欠損。正面に敲打痕。両側は擦耗か?

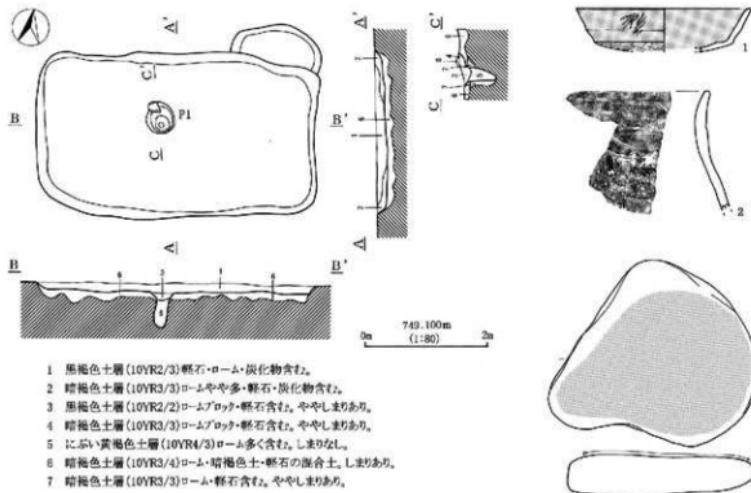
H1号住居址遺物觀察表(2)

## H2号住居址

遺構は65グリッドに位置する。規模は南北2.7m、東西4.6m、検出土面から床面までの深さは最深で0.2mを測る。平面形態は北東コーナー付近に張り出し部を持つ東西方向に長い丸角長方形である。床面は硬質で、ピットは中央に1個確認できた。壁は床からすり鉢状に立ち上がる。カマドは存在しなかった。形態的に堅穴状造構的な性格を持つ。

遺物は土器師の杯・甕、石器が出土した。土器は破片である。土器師は丸底で体部途中に明瞭な腰を持ち、口辺部外面に緩やかな段を有する。甕は破片であるが、H1出土の甕に類似する特徴が認められる。

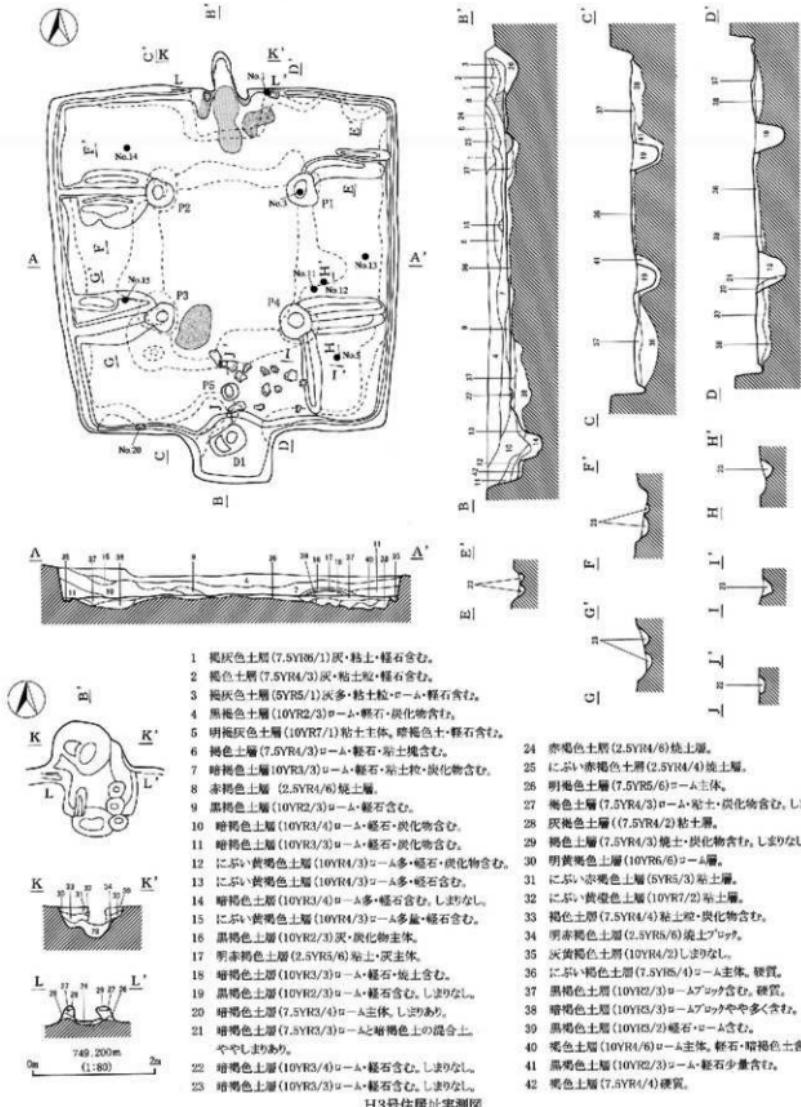
本住居址の時期は、H1ほど資料が存在しないため7世紀と特定できないことから古墳時代後期、6世紀後半から7世紀と幅を持たせたい。



H2号住居址遺構・遺物実測図

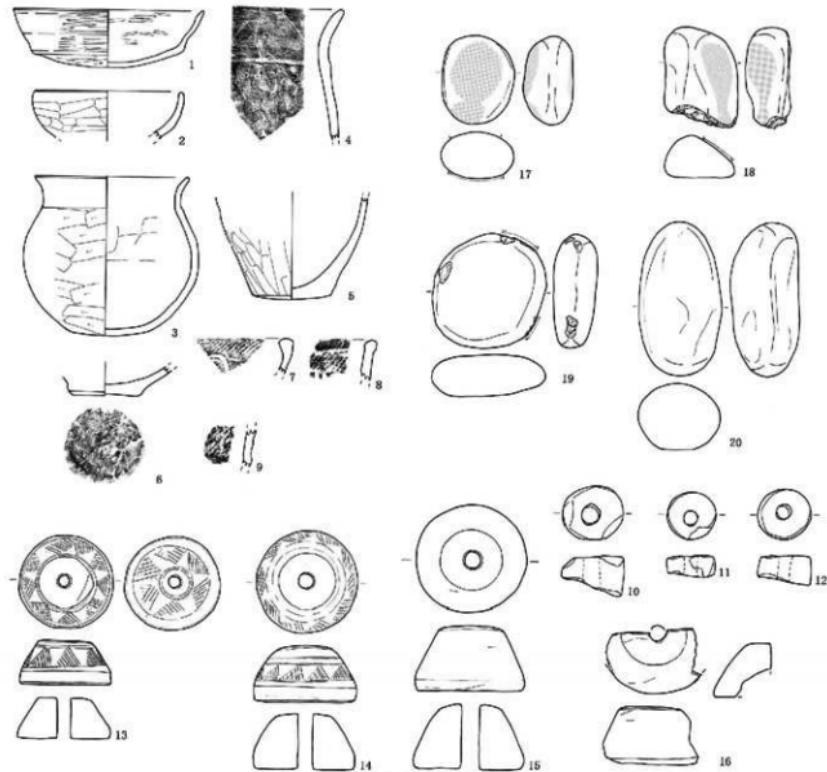
番号	器種	器形	口径cm 底径cm	底高cm 高さcm	厚さcm	測定・文様		残存率・部位	焼成	色調(外側)	備考
						内外面黒色 口凹横ナギ・有段 体部ヘラケズリ	15				
1	土器器	甕	[14.2]	丸底	(3.6)	口凹横ナギ・有段 体部ヘラケズリ	-	良	2.5YR3/1 黒褐色		
2	土器器	甕	-	(9.7)	(9.7)	口凹横ナギ 口内面ハナナギ 周縁部ヘラケズリ 丸底ヘラケズリ	口縁~肩部	良	10YR7/3 にふい黄褐色		
H2号住居址遺物觀察表											
3	石器	台石?	15.2	16.9	3.7	(1263.91)	5Y6/1 灰白色	正面が焼損か			

### H3号住居址



遺構は35グリッドに位置する。規模は南北5.6m（張り出し部除く）、東西5.6m、検出面から床面までの深さは最深で0.5mを測る。平面形態は方形で、南壁中央に方形の張り出し部を伴う。床面は全体的に硬質で上間状を示し、部分的に凹凸は認められるもののほぼ平坦である。壁際に幅10~15cm、深さ5~10cmの溝が掘り込まれている。ピットは床面上で5個確認でき、P1~4が主柱穴である。D1は張り出し部の中央付近に掘り込まれ、深さは床面から50cmを測る。

主柱穴から壁に向かい間仕切りと思われる溝が東西及び南北方向に存在した。東西方向の溝は平行して2本掘り込まれており、間仕切りの付け替え等の作業が行われた可能性も考えられる。カマドは北壁中央に構築され、両袖の一部及び火床から煙道の立ち上がりが残存していた。袖部は削り出した地山のロームを基礎として粘土で覆っており、石材は利用されていなかった。両袖に挟まれた部分には南北1m、東西45cmと広い範囲に焼土が堆積していた。煙道部は火床から壁外60cmの位置にて急な角度で立ち上がり、検出面に至る。煙道壁面には部分的に地山に貼り付けた粘土が残存し、熱によって一部焼土化していた。カマド掘方では煙道部周辺のローム層下に人為的と思える円形の掘り込みが存在し、検出面で認められたロームは何らかの理由でピット上に埋められた可能性が考えられた。円形の掘り込みは、位置的にカマドを再構築した際の掘り込みの可能性も窺えるが断定できない。住居の掘方は主柱穴4本を結んだ中央付近がやや方形状に高



H3号住居址遺構実測図

く、周辺が深く掘り込まれていた。中央の掘方が浅い部分は貼り床のみで周辺の深い部分は貼り床直下に暗褐色土、黒褐色土が埋め込まれていた。

遺物は土師器の壺・高壺・甕・小型甕、石製白玉・石製紡錘車・すり石が出土し、混入品として繩文土器が3片含まれていた。紡錘車は床面付近から3個、P2から欠損品が1個出土しており、2個の表面には鉤齒文（三角形）の文様が刻まれていた。土師器は丸底で体部途中に明瞭な棱を持ち、口辺部に緩やかな段を有する。甕は破片だが肩部が直線的などH1出土甕の特徴に共通性が認められる。

本住居址は、体部途中に明瞭な棱を伴い、口辺に段を有する壺が存在し、甕にH1出土の土器と厚み・胎土等の共通性が認められたため、6世紀後半から7世紀とした。

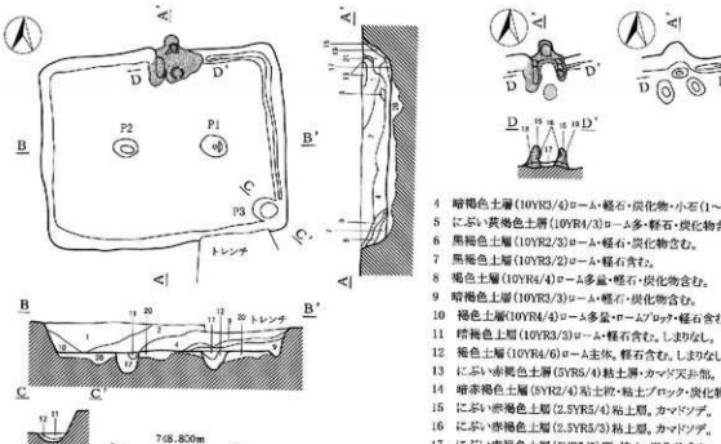
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	留高cm	調査文様	残存率・部位	焼成	色調(外因)	備考
1	土師壺	壺	15.3	9.5	4.7	口辺内側横ナデ・有ね 外面ハケズリ	90	良	7.5YR4/1 暗灰色	
2	土師壺	甕	[12.2]	—	(3.9)	口横横ナデ 外面ハケズリ段2ガキ 内面ヘラナデ	25	良	5YR5/6 灰褐色	カマド出土
3	土師器	甕	[12.4]	6.4	1.3	口横横ナデ 外面ハケズリ 内面ヘラナデ	75	良	7.5YR4/1 米白色	
4	土師器	甕	—	—	(10.5)	口辺横ナデ 外面ハケズリ 内面ハケナナデ	口縁～肩部	良	7.5YR7/6 稻穀色	
5	土師器	甕	—	6.4	(8.0)	外面部明顯・底部ハケズリ 内面ヘラナデ	肩下平～底部	良	2.5YR5/3 灰褐色	
6	土師器	甕	—	5.4	(2.4)	外面部露ハケズリ 内面ヘラナデ 底部木座痕	底部	良	7.5YR7/6 明快白色	
7	繩文土器	筒状	—	—	—	外面部口・弧状沈線 内面ナデ	口縁破片	良	7.5YR7/4 にぶい褐色	
8	繩文土器	深鉢	—	—	—	口縁折り返し・外面部 付縫文に刻み	口縁破片	良	7.5YR6/4 にぶい褐色	
9	繩文土器	圓錐？	—	—	—	外面部口 内面ナデ	破片	良	7.5YR6/4 にぶい褐色	
番号	器種	器形	口径cm 底径cm	留高cm 底径cm	厚さcm 底径cm	重量g	色調	備考		
10	石製壺	白玉	(1.2)	(1.1)	(0.8)	(1.57)	10YR5/1 暗灰色	孔径0.3		
11	石製壺	白玉	1	1	0.4	0.74	7.5YR7/7 暗灰色	孔径0.3		
12	石製壺	白玉	1.1	1	0.6	0.21	7.5YR6/1 暗灰色	孔径0.3		
13	石製壺	砂鉄質	3.5	2.1	1.8	39.59	5Y6/1 灰白色	孔径0.5～0.6		
14	石製壺	薄葉岩	4.1	2.3	2.4	59.86	7.5YR7/1 暗褐色	孔径0.6		
15	石製壺	砂鉄質	4.4	2.5	2.7	73.86	10YR5/1 青灰色	孔径0.7～0.8		
16	石製品	砂鉄質	—	[2.5]	(2.0)	(24.06)	2.5YR7/1 黄灰色	孔径[0.6～0.7] P2出土		
17	石器	すり石	7.3	5.8	4	218.22	3.5YR7/1 白色	正面にすり面		
18	石器	すり・磨石	8.3	6.1	3.5	203.97	2.5YR7/1 灰白色	下茎部に磨打面。正面にすり面		
19	石器	磨石	9.3	9.1	3.6	382.77	10YR6/1 暗灰色	縦面に磨打痕		
20	石器	すり・磨石	12.6	6.8	5.5	561.04	10YR5/2 灰褐色	部分的に滑らか		

H3号住居址遺物観察表

#### H4号住居址

遺構は1グリッドに位置する。規模は南北3.3m、東西4m、検出面から床面までの深さは最深で0.5mを測る小型の住居址である。平面形態は方形である。検出段階で、カマドが存在するとと思われる北壁中央付近には多量の粘土が確認できた。床面は全体的に硬質で平坦である。住居址東側の壁際には浅い溝状の掘り込みが認められた。ピットは床面上で径40cm、深さ35cm内外を測る2個が確認できた。主柱穴と思われる。カマドは検出段階で粘土が確認された北壁中央付近に位置し、貼り床上部部窓みに粘土を積み上げ構築されていた。また、周辺に多くの粘土が散在していた。両袖の上部には袖を覆うように粘土層が残存しており、壁際に煙道壁面と思われる焼け込みが認められた。粘土層は使用時からやや移動はしていると思われる状況であったが、天井に使用されたものと推察された。また、粘土層には煙道焼け込みの南に円形に近い壁面部と思われる焼け込み部分が存在することから、カマド上部に土器を設置する開口部である可能性が考えられる。住居の掘方には5～16cmの厚みでローム主体のにぶい黄橙色土が埋め込まれ、上面硬質であった。

遺物は土師器片が2点出土した。本住居址は出土遺物から古墳時代とした。

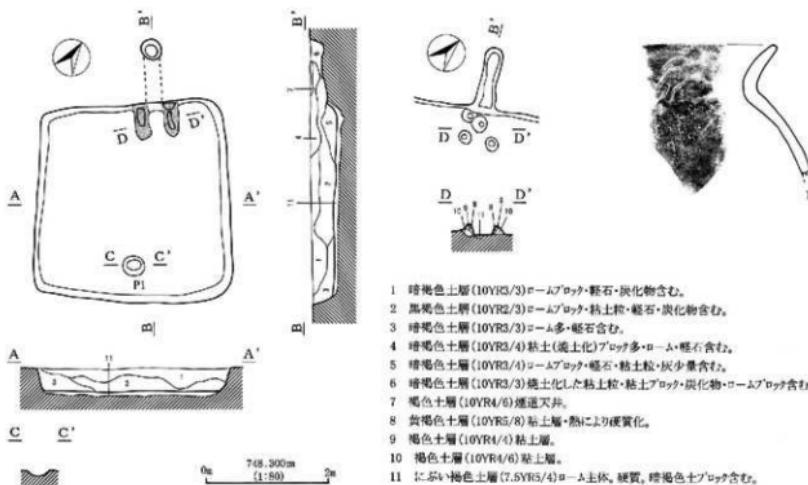


- 暗褐色土層 (10YR3/3) 軽石・炭化物・シーラン・ロームブロック含む。
- 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム・軽石・炭化物含む。
- 褐色土層 (10YR4/6) ロームブロック。

H4号住居址実測図

- 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム・軽石・炭化物・小石 (1~3cm大) 含む。
- にぶい赤褐色土層 (10YR4/3) ローム多量・軽石・炭化物含む。
- 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム・軽石・炭化物含む。
- 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム・軽石含む。
- 褐色土層 (10YR4/4) ローム多量・軽石・炭化物含む。
- 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム・軽石・炭化物含む。
- 褐色土層 (10YR4/4) ローム多量・軽石・炭化物含む。
- 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム・軽石・炭化物含む。
- 褐色土層 (10YR3/3) ローム・軽石含む。しわなし。
- 褐色土層 (10YR4/6) ローム・軽石含む。しわなし。
- にぶい赤褐色土層 (5YR5/4) 粘土層・カマド穴部。
- 暗褐色土層 (5YR2/4) 粘土層・粘土ブロック・炭化物多量・軽石・ローム含む。
- にぶい赤褐色土層 (2.5YR5/4) 粘土層・カマド穴部。
- にぶい赤褐色土層 (2.5YR5/3) 粘土層・カマド穴部。
- にぶい赤褐色土層 (5YR5/3) 灰・土・炭化物含む。
- 暗褐色土層 (5YR3/3) 粘土・ローム・軽石含む。
- にぶい赤褐色土層 (5YR4/3) 粘土層・燒土・炭化物含む。
- にぶい黄褐色土層 (10YR6/3) ローム主体。上面硬質。
- 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム・軽石・粘土含む。

H5号住居址



- 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム・軽石・炭化物含む。
- 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム・粘土層・軽石・炭化物含む。
- 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム多量・軽石含む。
- 暗褐色土層 (10YR3/4) 粘土 (焼土化) ブロック多量・ローム・軽石含む。
- 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム・粘土層・炭化物少量含む。
- 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土化した粘土層・粘土ブロック・炭化物・ロームブロック含む。
- 褐色土層 (10YR4/6) 逆造天井。
- 黄褐色土層 (10YR5/8) 基土層・熱により硬質化。
- 褐色土層 (10YR4/4) 粘土層。
- 褐色土層 (10YR4/6) 基土層。
- にぶい褐色土層 (7.5YR5/4) ローム主体。硬質。暗褐色土ブロック含む。

H5号住居址遺構・遺物実測図

遺構は53グリッドに位置する。規模は南北3.2m、東西3.1m、検出面から床面までの深さは最深で0.4mを測る小型の住居址である。平面形態は方形である。床面はほぼ平坦で全体的に硬質である。壁際の溝は認

められなかった。ピットは南壁寄りに1個存在したが、窪み状の浅いものである。カマドは北壁中央の貼り床上部の窪みに粘土を積み上げ構築されており、両袖及びトンネル状に掘り込まれた煙道・開口部が残存していた。石材は存在しなかった。煙道部は火床部の10cm上から径16~20cmを測るトンネル状の掘り込みで壁外80cmに至り、検出面で確認された円形の開口部に立ち上がる。開口部周縁及び煙道壁面・底面は熱によって焼土化していた。住居の掘方は全体に8cm内外の厚みでローム主体のにぶい褐色土が埋め込まれていた。

遺物は土師器の壺片が10点出土した。やや胴の張った形状と思われる。

本住居址は出土遺物から古墳時代としたい。

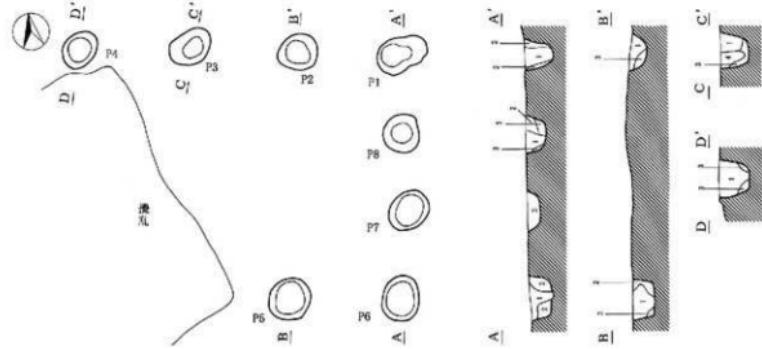
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	高さcm	調査・文様	現存率・部位	焼成	色調(表面)	備考
1	土師壺	壺	-	-	(10.0)	口沿内外面横ナギ 外面ハラケリ 内面ハラナギ	口縁~瓶部	良	7.5YR5/4 にぶい褐色	

H.5号住居址遺物観察表

## 第2節 挖立柱建物址 (F)

遺構は調査区中央28グリッドに位置し、西側は近年の搅乱に破壊されている。3間×3間の側柱で、ピットの配置は、東西方向に長い長方形である。ピット間(ピット中央から)は南北1.3m内外、東西1.8m内外を測る。ピットの形状は円形または楕円形で、径0.55~0.8m、検出面からの深さは0.2~0.45mを測る。遺物は出土したが小破片である。

本遺構の時期は、周辺で確認された住居址の年代が古墳時代に限定され、住居址に開まれた中央付近に位置することから古墳時代としたい。



1 黒褐色土層(10YR2/2)ローム・軽石・炭化物含む。

2 暗褐色土層(10YR3/4)軽石や多・ローム・炭化物含む。

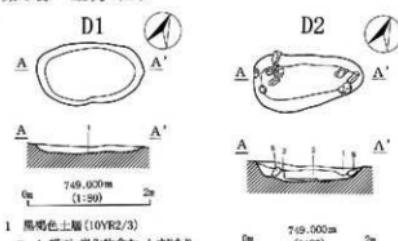
3 褐色土層(10YR4/4)ローム主体。軽石・暗褐色土含む。

4 黑褐色土層(10YR2/3)ローム・軽石・炭化物含む。

740.00m (1:80)

F.1号掘立柱建物址実測図

## 第3節 土坑(D)



1 黑褐色土層(10YR2/3)  
ローム・軽石・炭化物含む。しまりあり。

D2  
1 黒褐色土層(10YR2/3)

ローム・軽石・砂少無含む。

2 暗褐色土層(10YR3/3)

砂多。

3 黑褐色土層(10YR2/3)

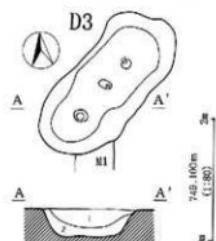
ローム・軽石3<1含む。

D3  
1 黒褐色土層(10YR2/2)

軽石や多・ローム・ロック含む。

2 にぶい黄褐色土層(10YR4/3)

軽石多・ローム含む。



D1~D3号土坑実測図

本遺跡から3基の土坑が発見された。D1は15グリッドに位置し、規模は長軸1.7m、短軸1.0m、検出面から底面までの深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。D2は30グリッドに位置し、規模は長軸1.7m、短軸0.65~0.9m、検出面から底面までの深さは0.25mを測る。長軸の両端付近から0.1~0.2mの礫が多数出土した。D3は18グリッドに位置し、M1に切られる。規模は長軸2.8m、短軸1.2m、検出面から底面までの深さは0.45mを測る。底面には直列する径0.16~0.2mを測る3個の小ピットが存在した。形状から落とし穴の可能性が考えられる。

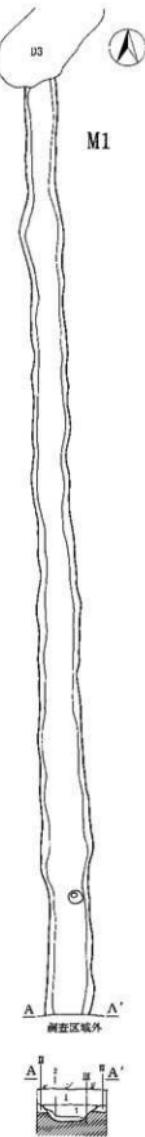
#### 第4節 溝跡(M)

##### M1号溝跡

造構はD3を切り、18グリッド~91グリッドにかけて存在し、調査区外に至る。規模は長さ19.2m、検出面での幅0.9m内外、底幅0.4~0.7m、検出面から床面までの深さは最深で0.1mと非常に浅い。造構の掘り込みは調査区埋土直下から掘り込まれており、年代の断定はできなかった。遺物は出土しなかった。調査区北端では僅かに掘り込みが認められる程度のため、調査区外の北側では溝の存在が僅かに判断できる程度の残存状況と考えられる。比較的新しい時代の溝跡と思われる。

##### M2号溝跡

造構は61グリッド~88グリッドにかけて存在し、H1を切り、45グリッド南端で消滅する。調査規模は長さ11m、検出面での幅0.7m、底幅0.3~0.7m、検出面から床面までの深さ0.1mを測る。造構の掘り込みは調査区埋土直下から掘り込まれており、全体的に浅く、年代の断定はできなかった。遺物は出土しなかった。比較的新しい時代の溝跡と思われる。



M1号溝跡実測図



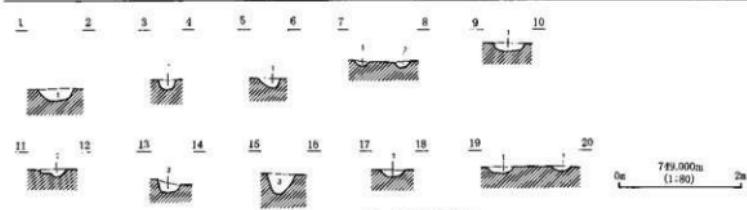
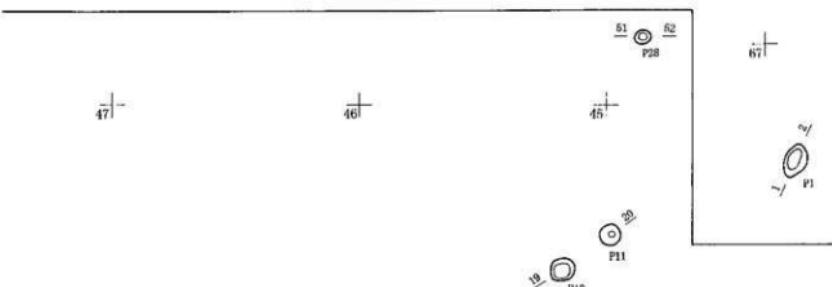
M2号溝跡実測図

- I 表土： 鋸石充填の埋土(荒地層)
- II 明褐色上層 (10YR3/3) 表土とロームの中間層。
- III 明黄褐色土層 (10YR6/6) ローム層。
- 1 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム層・鋸石・炭化物含む。
- 2 粉褐色土層 (10YR3/3) 鋸石や多孔性含む。

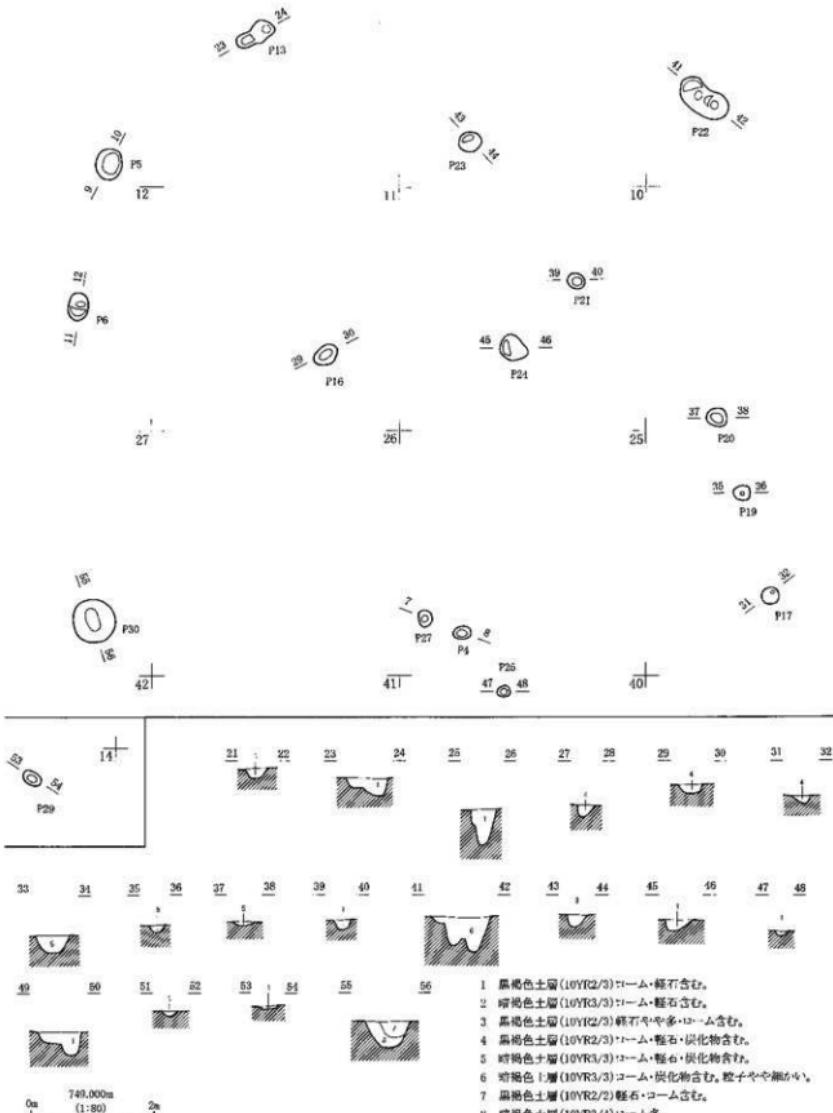
0m 749.400m (1:100) 2m

## 第5節 ピット (P)

直径80cm以内で、規則的な配列を伴わない  
掘り込みを単独ピットとして取り扱った。



ピット実測図 (1)



ピット実測図 (2)



中金井遺跡群 下金井遺跡全景（東から）



中金井遺跡群 下金井遺跡全景（西から）

図版  
2



調査区全景（東から）



表土除去作業（西から）



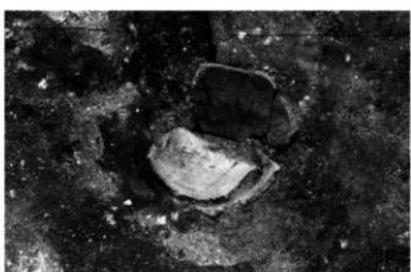
調査風景1（西から）



調査風景2（西から）



H1号住居址全景（南から）



H1号住居址カマド煙道土器



H1号住居址カマド（南から）



H1号住居址カマド（西から）



H1号住居址白瓦出土状況 (H1-17~19)



H1号住居址カマド東脇遺物出土状況



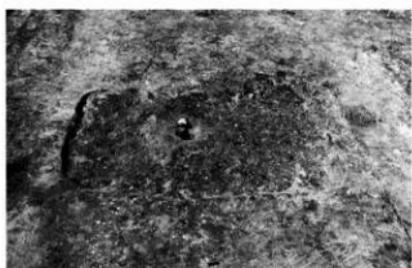
H1号住居址カマド窯跡 (H1-17)



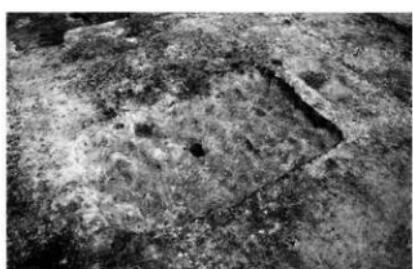
H1号住居址カマド塙方 (H1-18)



H1号住居址塙方全景 (H1-19)



H2号住居址全景 (H2-1)



H2号住居址塙方全景 (H2-2)

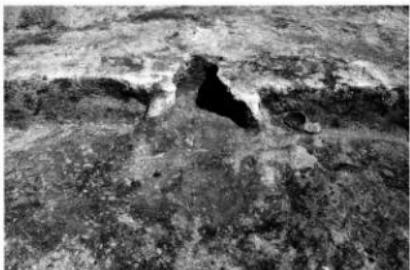


H3号住居址全景 (H3-1)

図版4



H3号住居址全景遺物除去後（南から）



H3号住居址カマド（南から）



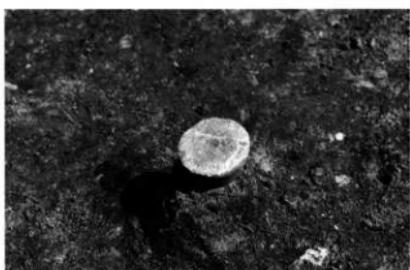
H3号住居址カマド東脇遺物出土状況（NO1）



H3号住居址 P1遺物出土状況（NO3）



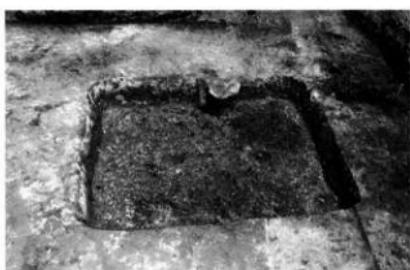
H3号住居址（NO13） 紡錘車出土状況



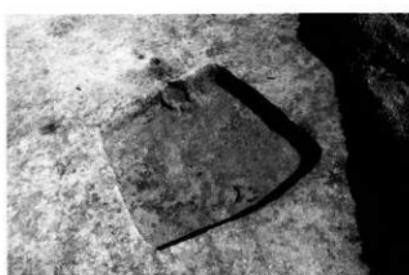
H3号住居址（NO14） 紡錘車出土状況



H3号住居址塀方全景（南から）



H4号住居址全景（南から）



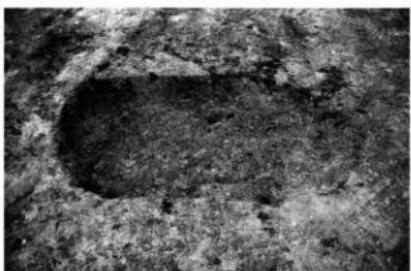
図版  
6



H1号住居址堀方全景 (南西から)



F1号掘進柱建物址全景 (南から)



D1号土坑全景 (南から)



D2号土坑全景 (南から)



D2号土坑石除去後全景 (南から)



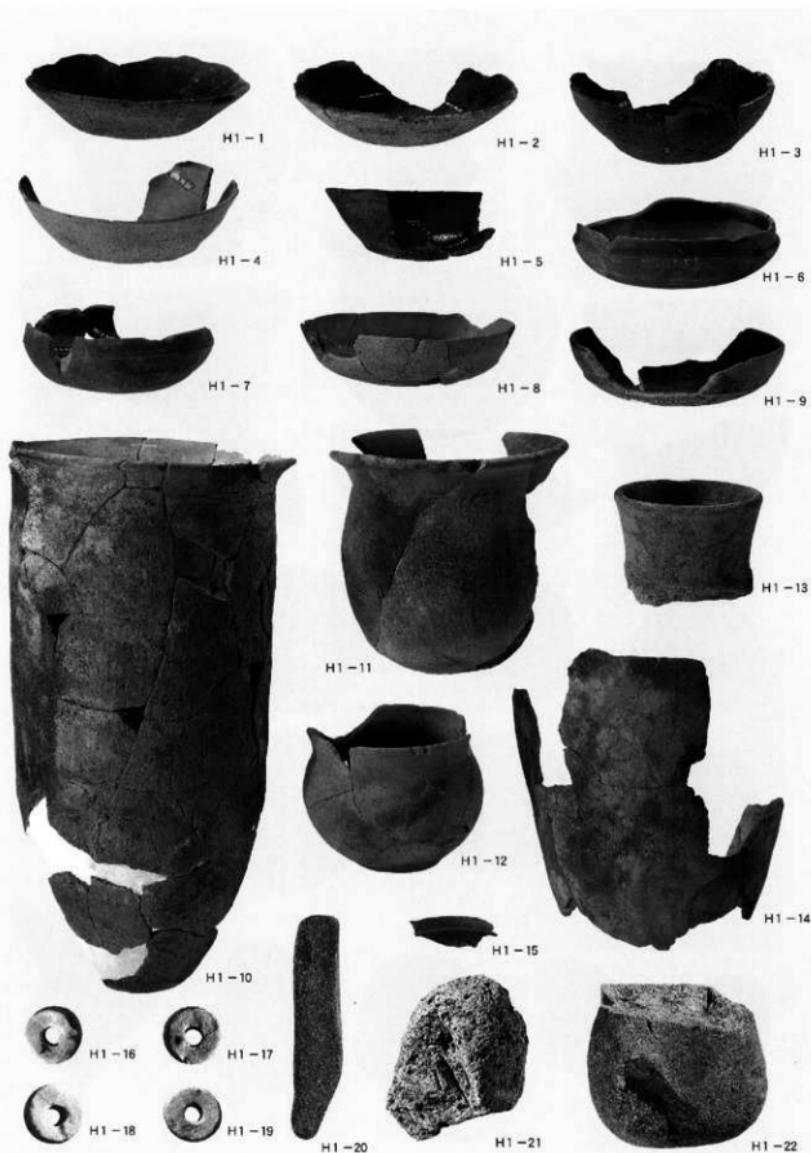
D3号土坑全景 (上から)



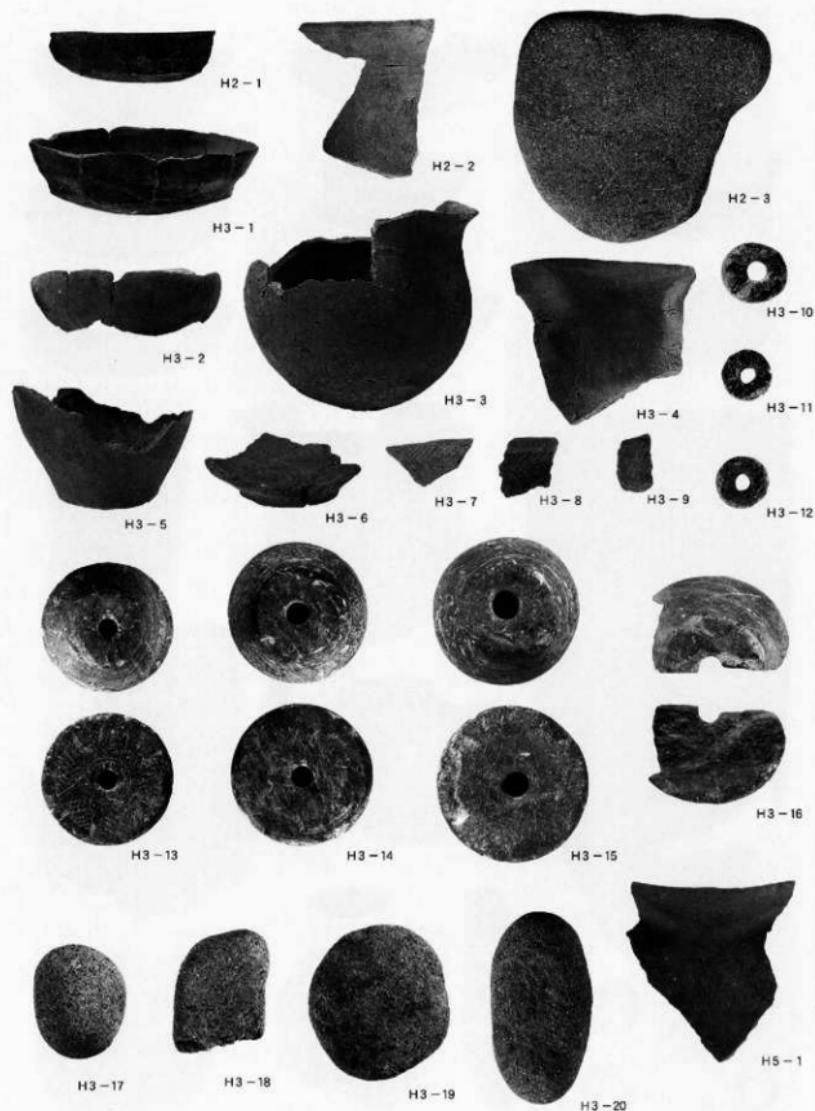
M1号溝跡全景 (北から)



M2号溝跡全景 (北から)



図版  
8



H2・3・5号住居址遺物



佐久市埋蔵文化財調査報告書 第210集  
中金井遺跡群 下金井遺跡  
平成24年（2012）12月

編集・発行 佐久市教育委員会  
〒385-8501 長野県佐久市中込3056  
文化財課  
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953  
TEL0267-68 7321

印刷所 キクハラインク有限会社

